

2022年6月19日(日)

老球の細道674号

### 有言実行

会津バスケットボール協会 室井 富仁

世界中がコロナ臭さからきな臭さ変わってきている中、日本では通常国会が閉会し、参議院選挙に向けた動きが本格化してきた。各党がコロナ対策、物価高対策、防衛対策等を中心に公約を訴えている。公約したことをどれだけ実行できるかが政治家の命である。そしてバスケット指導者も同じように、宣言したことを実行しなければ信頼を失うのである。

先日の県高体連大会において渡邊拓也先生率いる福島南高校が男子の部で優勝を果たすことができた。渡邊先生は福島西高校でも優勝(全国ベスト8)しているが、女子から男子チームへ転換、福島南前コーチの名将水野慎也先生の後任という難しい状況の中で、移動して2年もたたないうちに優勝を達成してしまった。見事というほかはない。まさに名将であると同時に、渡邊先生は「有言実行」の指導者である。

以前から渡邊先生とはバスケットボールに関して意見交換をしている。大会前には「ミラクルを起こす」「アップセットを起こす」「鍛えなおす」というメールを度々いただいたことがある。今回も1月の新人戦で思うようなゲームができず、県高体連までにもう一度鍛えなおすメールが届いていた。私も準々決勝のゲームを観戦させてもらったが、チームに勢いがあり、トランジションバスケットボールを徹底して、選手に伸び伸びプレイさせるコーチング姿勢を拝見して、今回はひよっとするとひよっとするかもしれないと思っていた。そしてその通りになった。

人間の行動には4パターンあると思う。一つは「不言不実行」。問題外である。二つは「有言不実行」。口先男とののしられ、いずれ誰からも相手にされなくなるだろう。三つめは「不言実行」。今は昔、高校時代、高倉健さんの映画大ファンだった私は、「男は黙って・・・」の不言実行にあこがれていた。しかし、ある時誰かに「不言実行は、もし実行できなくてもだれからも非難されないから傷つかないよな。逃げ道を用意しているのと同じだよな」と言われてから、四つ目の「有言実行」にスタンスを変えた。想えば宣言したことが実行できたのはほんの少ししかなかった。しかし「できなかつたら非難されたり、馬鹿にされたりするからがんばらなければ」という背水の陣モチベーションが「努力」という行動を身につけさせてくれた。実行するための努力のプロセスこそ「有言実行」の神髄であり、そこで私たちは色々なことを学ぶことができる。

色々なスポーツの名将の書いた本を読むと、例外なく皆「有言実行」である。人間は普通弱い生き物である。弱い生き物が今までにないミラクルをわが身に起こすためには、三国志『赤壁の戦い』のように背水の陣をしなければならぬ。指導者、リーダーにとっての背水の陣は「有言実行」にチャレンジすることである。

目標を達成するためには、「目標を書く」「目標を宣言する」「計画を立て、実行する」そして「今すぐ始める」。最後に「途中でやめない」。勝者は決してあきらめない。